

近代日本の独立画家の画風変遷と支持層 — 大橋翠石を事例として —

むらた たかし

村田 隆志 (大阪国際大学)

発表要旨

14
時
50
分
—
15
時
30
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ー
ル

大橋翠石(1865-1945)は、近代の日本画壇において、特異な活動を展開した画家である。岐阜・大垣に生まれ、郷里で戸田葆堂に、京都で天野方壺に、東京で渡辺小華に師事した翠石は、帰郷後に愛玩していた猫を多く描いていたところ、「虎も描けるのではないか」という知人の示唆を受けて虎図に取り組んだ。濃尾大震災で生家と父親を失い、納骨に訪れた京都で円山応挙の虎図の写真を入手したことから、毛描きに工夫を凝らすようになった翠石は、精緻な描写の虎図を完成させ、内国勸業博覧会や絵画共進会などで入賞を重ねた。さらに1900年のパリや、1904年のセントルイスでの万国博覧会では連続して金牌を獲得している。「虎の翠石」として画名は高く、晩年に発行された「日本古画評価見立便覧」(1930年)では、翠石の作品は同世代の横山大観、竹内栖鳳と同等の評価額で掲載されてすらいる。

しかし、中央の画壇と関係を持たず、大垣や神戸・須磨で画業を展開した翠石の生涯と芸術に対して、美術史研究者は長く等閑に付してきた。結果、翠石の研究についての蓄積は極めて乏しいままに推移し、翠石の姻戚にあたる眼科医、青木彌太郎の『大橋翠石』(私家版、1981年)がわずかに存在するのみに留まっていた。以前、発表者は本書を参考にしつつ、全国に散在する作品の調査を進めながら美術史の方法論を用いて研究を深め、担当した田原市博物館等での回顧展「大橋翠石——日本一の虎の画家」(2008年)と図録等で翠石の生涯と芸術についての知見を世に問うたことがある。

だが、その時点では詳細が不明であったのが、翠石の画風変遷と支持層の実態である。文部省美術展覧会などの官展や団体展と無縁でありながら、翠石は制作を続け「独立画家」として認識され、評価されていた。その後の研究の進展により、その理由として、翠石が神戸移住を契機として取り組んだ濃密な背景描写の採用、解剖学の知識を背景にした、より写実性の度を加えた作風への変化や、新興都市・神戸で経済面でも文化面でも中心にいた川崎正蔵・鶴崎平三郎の人脈を背景とした支持層の存在を挙げることができるようになった。また、日本海海戦で重要な役割を果たした戦艦三笠に翠石の作品が飾られており、東郷平八郎が参謀の秋山真之の功を賞してそれを贈り、翠石自身とも関係を構築したことによって、職業軍人層に翠石の画名が浸透したと考えられることも一因であったとこのたび確認することができた。

日本近代美術史上には、画壇に属せずに独自の画業を展開し、番付等で独立画家と位置付けられた、木村耕巖や甲斐虎山のような特異な画家が存在する。本発表は重要な新出作品や新知見を踏まえて、大橋翠石という代表的な独立画家の事例を紹介することによって、斯界に複眼的な視点を提供しようとするものである。